

第三十一回

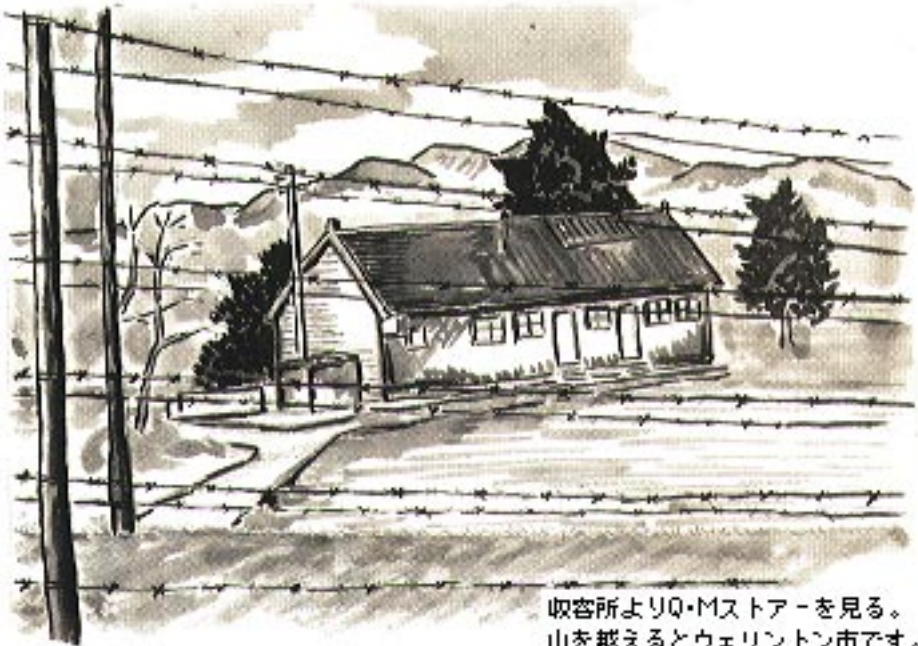
パンツ、シャツ、靴下など、穴があいて使えなくなつたものは月一回、ニュージーランド兵が使つた中古品と換えてくれる交換日があつた。

こちら側から代えたい物と数量を、Q・Mストア(日用雑貨の交換所)へ事前に知らせるのもラッパ吹きの仕事であつた。

ニュージーランド側から今月は何着まで交換という通報があり、あらかじめキャンプ内で決めた者だけが、古い衣類を持って私の後についてくる。内側の柵を出るとき、「Q・Mストア」と告げると警備兵は私の腰につけているラッパを見ただけで黙つて通してくれた。ま

た、自分一人の場合でも私の番号「六六一」ホスピタル」など行き先を告げ、帰る時間を書いて渡す、すぐ門を開けてくれた。

Q・Mストアでは靴やズボンのようなサイズのあるものは面倒だつた。捕虜仲間には小うるさい奴もいて、びつたりサイズが合わないといふ文句を言い出し、そのたびに英語の喋れない私が、相手と手まねで交渉するのはほとほと疲れ、ラッパ吹きもなかなか楽な仕事ばかりではなかつた。



収容所よりQ・Mストア-を見る。
山を越えるとウェリントン市です。

所内が落ち着いてくる。半年に一回、各班で演芸会をやった。シロウトながら芸達者な兵隊がいて芝居をやり、出し物は赤城山の「国定忠治」や「臉の母」の番場の忠太郎などの時代劇が多かった。

私は道具方を手伝った。かつらは最初は紙で作っていたが、それではあきたらず、演技者の頭の形を針金でとり、紙を張り付けた上に馬鈴薯などをいれる麻袋の糸を髪の毛にして取っただいた飯粒ののりで細かく張り付け、黒の靴すみを塗って仕上げた。

伊藤兵曹は木で刀を作り煙草の銀紙を張った。陸軍の坂口さんは長唄の師匠だったので三味線まで作った。

最初は砂糖を入れる袋のクラフト紙を貼り付けてみたが、音がまるで駄目。兎の皮をはいでやったがこれも駄目。やはりどうしても猫にかぎる。猫をなんとかして欲しい、と考えた彼は罠に掛かった兎を食べに野良猫がやってくるのを知って、とうとう猫を捕まえることができた。三味線の糸は収容所側に頼むとチェロの太い弦をくれた。これを割いて、太いところは剃刀の刃で削り、ローソクでみがき上げて出来上がり、仲間たちを驚かすほどいい音色を響かせた。

高橋さんはバイオリンまでつくって演奏した。

演芸も本格的になり、ニューヨーク側側の将校たちや通訳たちも見学に来て大喜び。敵味方もなく、みんな一緒に楽しむようになった。映画も時折観光や島の風物など、捕虜には当たり障りのないものを見せてくれるようになった。

私は昼間診療所にいながら二、三カ月かけて九七式大艇の模型をコップで作った。この柳の木は柔らかいので削りやすく、サンドペーパーをかけ絵具まで塗って仕上げた。敵さんは細工をする程度の小さい刃物は何もいわなかった。ジャック伍長は来るたびにこれを「ハウマッチ」と欲しがるので、何ペンスかで売ることにした。

小物からだんだん大物を作るようになって、やはり今の道具ではあきたりず、ジャックにお金はいらぬから絵具が欲しい、絵筆を持ってきてくれと頼んで、すくすく道具を描えた。

こうして捕虜生活も最後の頃にはニュージールランド側と日本側とのお互いの交流が盛んになり、ますます友好的になっていった。自分たちの小屋の空地に家庭菜園のようなものをつくり、小松菜にんじんなど野菜や、花などをつくってわれわれの栄養源にした。

収容所の警備兵の中にはわれわれ捕虜に

「ニュージールランドと日本は戦争しているけれど、お前と俺とは友達同士」

と言ったり、日本人はよく働くので

「捕虜の年季が終わったら、俺の妹と一緒に来て、皆で暮らさないか」

と結婚を申し込まれた者もいた。

つづく

次回第三十二回は七月十三日(火)の予定